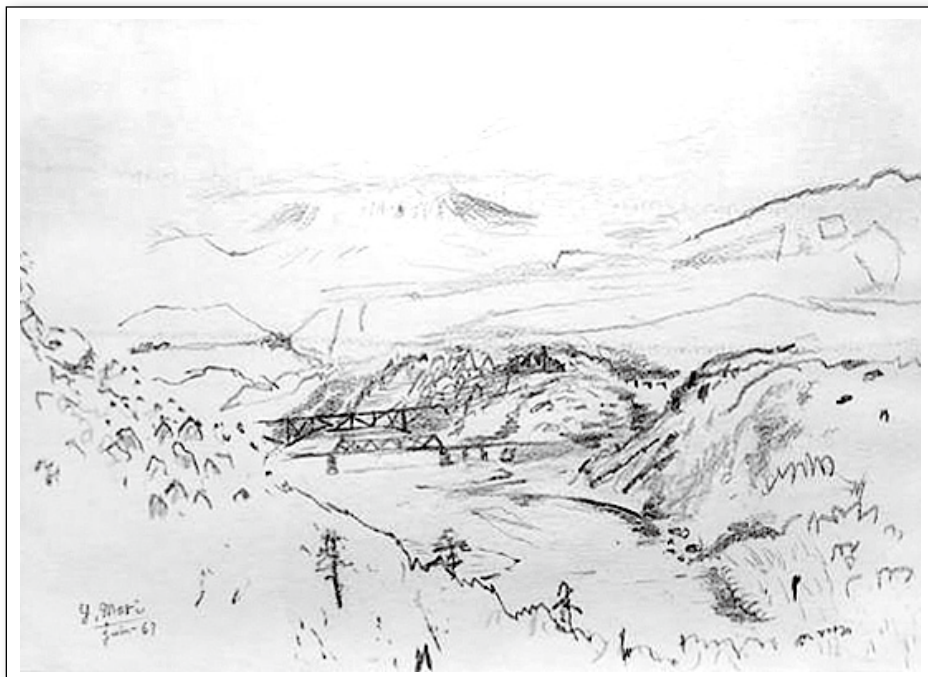


# 主体美術

## SHUTAI-BIJYUTSU

主体美術協会は、1964年9月に結成されました。  
私たちは作家一人一人が創作を自由に発表できる場を確保し、美術家の集団として積極的に活動していきたいと思ひます。  
私たちは世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局  
〒144-0047  
東京都大田区荻中3-14-8  
山崎 弘方 TEL / FAX 03(3742)5182



森芳雄「中津川ホテルより展望」510×420mm 1967年

## 2026.8 No.118 CONTENTS

1p 巻頭言 ……大口 満

### 2-5p 特集

「森芳雄展を拝見して」

……………山本 靖久

2026年4月1日(水)～5月6日(水・祝)  
S-Gallery 肅榮實美術館(茨城県境町)

### 6-7p 地域展報告

神奈川作家展…石田 俊哉

中部作家展…三浦 洋次

武蔵野作家展…大西 佐頼

ちば作家展…土川 祐子

### 7p 第61回主体展

企画展示のお知らせ

「私の仕事

いま・むかしⅣ」

………展覧会委員 藤田 俊哉

### 8-9p ●作家インタビュー vol.1

長沢 晋一さん(埼玉県)

聞き手/東堤 友美

山崎 清子(編集部)

桑原 雄一(編集部)

### ART WAVE

### 10p ●フォト・エッセイ

藤木もとひろ(東京都)

池田 正子(北海道)

### 11p ●各地の美術館から

池田20世紀美術館

開館50周年記念

「水村喜一郎展」

生きて、旅して、絵を描いて…

……………返町 勝治

### 12p インフォメーション

展覧会記録・編集後記・その他

## 「雪と私」

川越の知人は「アフリカのキリマンジャロにのぼったことはあるけど、大口さんの屋根に上がるのは怖い。」とつぶやいた。豪雪地妙高市在住の私を気遣って、除雪作業の援助にやってきた登山サークルの一人だ。毎年屋根にのぼって雪下ろしをやっている向かいの主人は、今年足を滑らして落下。骨盤骨折で1ヶ月半の入院生活。私も屋根にのぼったが、年々恐怖感が増してくる。足腰が弱り五十肩で通院している身なのだから、体勢を崩して重いスノーダンプごと屋根から落下する可能性はゼロとはいえない。

しかし、雪下ろしをしなければ戸は開かなくなるし、家はつぶれる。また、この地域では男女を問わず、通学の子どもたちが安全に通えるよう路上の雪を『流雪溝』に流し込む雪掘り作業が早朝の日課だ。人が通れる道にするためには、わが家の周りだけやらないわけにはいかない。

つまり雪は重労働を強いる自然災害だ。この地域にいる限り、春になれば消えてなくなる悪魔のような存在に立ち向かうのが宿命といえる。

ところが、そんな私に寄り添って作品にしてくれた人がある。ゴミ集積所への細い近道が、胸ほどの高さまで雪で埋まり誰も通れない。一人私は高く積もった雪にスノーダンプを突き刺し除雪作業に精を出していた。その姿を撮った写真を榎本香菜子さんに送ったところ、なんと『蜜蝋作品』に変身して送られてきたのだ。日々の奮闘をほめられたようで、こんなにうれしいことはなかった。今も冬の御守り神として私を励まし続けている。

では、雪はただ嫌な存在かと問われれば、そうではない。雪を利用したスポーツや遊びに親しみ、雪解けの水がおいしい米の土壌を作ってくれる。また、時折見せる快晴の妙高山は神々しい輝きで麓の私たちを癒してくれる。そして、私にとっては一面の白い世界が制作の源となる。鉛色の空のもとでは哀歌を奏で、燃え上がる陽光を浴びれば宝石のようにきらめく雪。闘う

相手だというのに、愛さずにはいられない。春が来て消え去る前に思う存分対話し、胸のときめきを温存する。

しかし、初めから雪をテーマに出品していたわけではない。様々な問題を抱える高校生のクラス担任をしていた若いころ、夏休みになると彼らをモデルに出品していた。中途半端な絵が多くて、何度か落選した。ご存命だった植田寛治さんから「これだけデッサンのくろっている人物はちょっと…。ひざはこんなところじゃないわけだし…。教師をやっているそうだけど、教科は何なの。」と尋ねられる始末。續橋守さんからの「だんだん良くなってきているから、がんばりましょう。」という励ましの言葉で支えられてはいたのだが、そのころ京都教育文化センターで個展をやった際に、木村正恒さんから「人物画では将来性がないので、雪の風景画で勝負したほうが良いのでは。」と勧められたのがきっかけだった。初めての雪景色という風景画で挑戦したところ、思いがけず佳作作家となった。「昔だったら賞に入るような絵ではない。」と中村輝行さんに評されたが、その通り平凡な絵だ。その絵は富山県境に隣接する糸魚川市の市振漁港。私が描きたい絶景スポットは『立ち入り禁止』区域の雪捨て場。吹雪のさなか、大量の雪を積んだダンプカーのおじさんから「そんなところで何をやってんだ。危ないから早く出る。」と叱られるのも当然だ。それでも懲りずに、何度も足を運んだことが思い出される。

昨年6月、京都の『ギャラリーヒルゲート』で個展をやった際に、通りすがりと思われる初老の男性が入ってきて熱心に鑑賞している。聞けば神戸在住の医師で、「若いころから毎年妙高のスキー場に行ってます。まさかここで妙高の雪景色に出会うとは。感激しました。」と語ってくれた。ありきたりの雪景色でも、たまには役に立つのかもしれない。

# 「森芳雄展を拝見して」

山本 靖久

2026年4月1日(水)～5月6日(水・祝)

S-Gallery 肅黎寶美術館<sup>しゅくさんぼう</sup> (茨城県境町)

茨城県境町にある S-Gallery 肅黎寶美術館<sup>しゅくさんぼう</sup>で開催された「森芳雄展」を責任者の山崎弘さんのトークイベントに合わせて拝見してきた。

この展覧会は、境町アートプロジェクトの武蔵野美術大学の後輩である画家の卯野和宏氏を中心に企画され、名古屋画廊の中山真一氏所蔵の作品提供によって実現した。

森芳雄氏は、1964年の主体展創立から亡くなられる1997年まで主体の代表者を務められた画家である。そして明治から平成を駆け抜けた日本を代表する画家でもある。同世代の画家達は、影響を受けた画家に森芳雄をあげる作家は少なくない。特に代表作である《二人》という作品は、多くの作家が口を揃えてその名をあげる作品で、日本美術史上で語り継がれるべき秀作であり、私自身もこの《二人》の造形の素晴らしさに感銘を受けた一人でもある。

この度の展覧会場である肅黎寶美術館は、境町における文化振興や地域活性化を目的として、2020年に隈研吾氏設計により建てられた美術館である。木地と白を基調とした端正な空間に80号のタブローから小品、素描24点が、年代別に飾られ、併せて作品に森芳雄の言葉が添えられていた。

まず会場に入ると80号の1991年作《夏》が目に入る。光溢れる空間の中、逆光の母子像が矩形の中に厳格な構成で描かれている。そしてリーフレットの表紙にもなっている1954年作《母と乳飲み子》や1980年作の《女》など群像の作品を観ることができた。森芳雄は、「率直

に言って人物の構成は群像になると難しい。日本の明治以降の油絵にはその積み重ねが少ないと思う。」と語っている。確かに人物という特異な形態を持ったフォルムを互いの形を生かしながら、コンポジションとして、美しいフォルムを造形していくことは難しいと感じる。ただ森芳雄は、造形的に不必要なものを排除して、洗練された端的で無駄のない表現を持って作品化する。

その他、風景や静物の作品が並び、画集では観たことのない作品も散見され、素描も8点並べられていた。そして空間の最後に1962年作の《無題》と称された赤い抽象的な小品が飾られていた。森芳雄は、戦後のヨーロッパ絵画の動向、アンフォルメルなどに影響を受けて、「その中で、とくに目ざましいのは、抽象の動きであると思う。純粋な形態の美を追求する。つまり、純粋な造形の追求。」と語っている。具象表現でありながらも、抽象的な意識で色と形を追い求めていた森芳雄の造形の本質を垣間見ることができる。

14時になり山崎さんのトークイベントが始まった。最初に学生時代の教員森芳雄とのエピソードが話された。対象への観察描写を3h (head、hand、heart) で描くこと。画面に加筆されて、再現描写ではなく画面構成の大切さを痛感させられたこと。モデルと一緒に描く機会があり、学生が提供した画材で森芳雄も描く。授業後に女子学生から描いた作品をくださいと言われ、「あー損した」と言いながらも一枚一枚サインをして作品を学生に手渡した微笑ましい体験も話された。

また奥様を亡くされた際に洗礼を受けたこと。その悲痛の中、手を骨折された。「絵を描くことは非常にデリケートなもので、生活そのものが出るものだ。イライラして神経が高ぶっているので、神が腕を折られ、暫く休めと言っているのだと解釈している。」と語ったそうである。普段は「頑張る」という言葉は使わない森芳雄がその時だけそれを使った。「見せたくないようなところを、吐露して下さる。乗り越えていこう、そういう気持ちを伝えて下さる。自分をさらけ出して言い聞かせるように心情を語って下さった。」という当時の想いを山崎さんは語り、そういう森芳雄の人間性に感銘し、師事することを決めたそうである。

出入りを許された西原のアトリエでは、二人でハーバート・リード<sup>ちゅうげんえん</sup>著の『芸術の意味』を読み解説もしてくれ、また『歴代名画記』の張彦遠による謝赫の『画の六法』も勉強した。謝赫という人は、五世紀の、南齊の画家で、人物を得意とした。それを、七世紀の張彦遠という人が『歴代名

Yoshio Mori

S-Gallery 肅黎寶美術館<sup>しゅくさんぼう</sup>  
茨城県協成郡境町 1455-1  
Tel.0280-23-4148  
主催：境町後援 企画：境町アートプロジェクト 協力：名古屋画廊

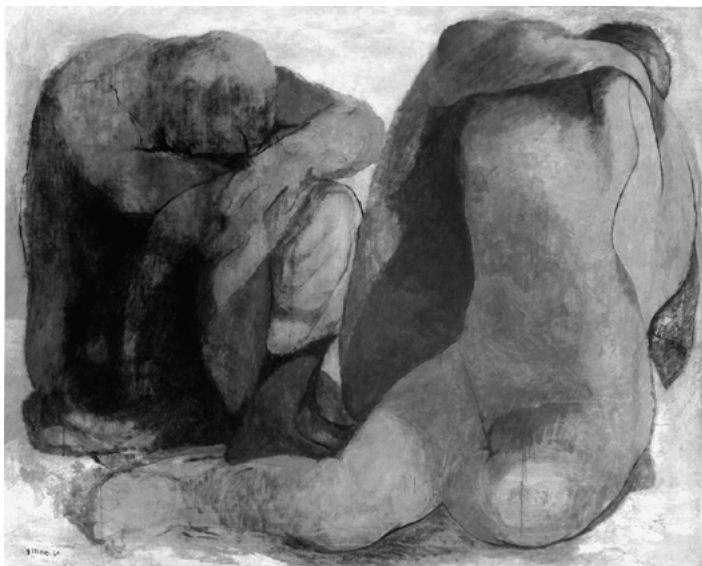
森芳雄展

2026年4月1日(水)～5月6日(水・祝)

■ 休館日：月曜日、火曜日 (5/4月8・5月8日は開館)  
■ 開館時間：午前 10:00～12:00 (入館11:30まで)  
午後 13:15～17:00 (入館16:30まで)  
■ 入館料：330円  
18歳未満、65歳以上は無料 (年齢が確認できるものを提示)  
各種障がい者手帳をお持ちの方と付き添い1名 無料  
<https://www.town.ibaraki-sakai.lg.jp/page/page004021.html>

ギャラリートーク 4月4日(土) 14:00～15:00 美術館内 ※予約不要

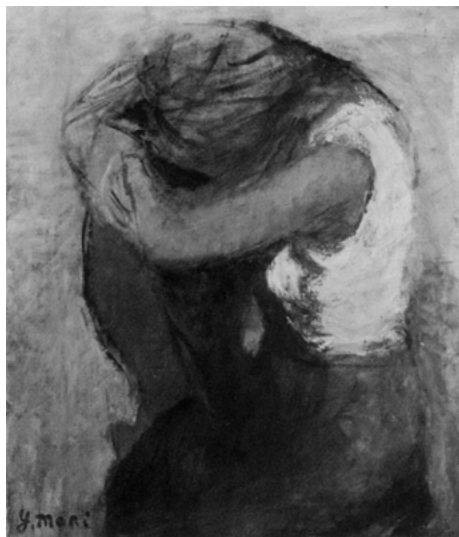
山崎弘 (画家、武蔵野美術大学大学院修了、主体美術協会会員) 聞き手：卯野和宏 (画家、境町アートプロジェクト)



「二人」 F100 1950年 (展示されておりません)



「夏」 F80 1991 年



「女」 F10 1980 年



「無題」 SM 1962 年



ギャラリートーク参加者



作品の前での  
ギャラリートーク

画記』で取り上げて記したのが、謝赫の『画の六法』である。その中にこう書かれている。「謝赫はこう言っている。画には六法がある。一に気韻生動(優れた精神が生き生きと脈動していること) 二に骨法用筆(力強い骨格を形づくる用筆の法) 三に応物象形(対象に応じて形をうつすこと) 四に随類賦彩(対象に従って色彩を施すこと)と云い、五に経緯位置(画面を構成すること)と云い、六に伝模移写(模写すること)と云う。古より、これを兼ね備えた画家は稀である。古の画は、一方では形似(写実)つまり形をうまく似せながら、さらに骨気の表現を尚んだ。ということ、対象の形態を写實的に描くこと以上のものを絵画に求めた。今の画は、たとえ形似はうまくできても、気韻のおもむきがない。実に気韻こそ本質的なものとして、絵画に立ちむかえば、形似(写実)はおのずからそこに備わるものだ。」このように古の画家の優れた考えと自分を対峙し、唸りながら語る森芳雄の姿勢から「絵画の本質」を叩き込まれたそうである。

そして展覧会にも同行した。西洋美術館で観た「ゴッホ展」では感動されて、「風景画は実に空間をうまく使っている。デッサンはもう歌うように描いている。羨ましい。俺なんかみたいに、ブツブツ悩んでいない。」と言ったそうである。ゴッホは浮世絵に影響を受けたのは有名であるが、広重の模写をした作品を観ていた他の鑑賞者が「花札だ!」と言ったことに、「花札じゃない! 浮世絵だ!!」と大きな声でしかりつけ、展覧会場が一瞬シーンとなったそうで、その時山崎さんは美の尊厳を汚す行為を許さない森芳雄の信条が感じられたそう。

その他、森芳雄も山崎さんも共にクリスチャンである。「一緒に礼拝した際に、森芳雄をほとんど知らない人の中で、声を振るわせ『私は迷える子羊でした。』と言ったことがあり、ものすごく謙虚な人だと感じられた。キリスト教というものが森芳雄の意識の深いところにあったから生きざまと絵がすごく重なって見え、自己否定と肯定、暗さと明るさ(闇と光)… ものすごくふり幅が大きい。苦悩、それを超えた喜びがあったから、画家としての責任と使命を全うされたのだと思う。」と森芳雄への敬愛の念が語られた。



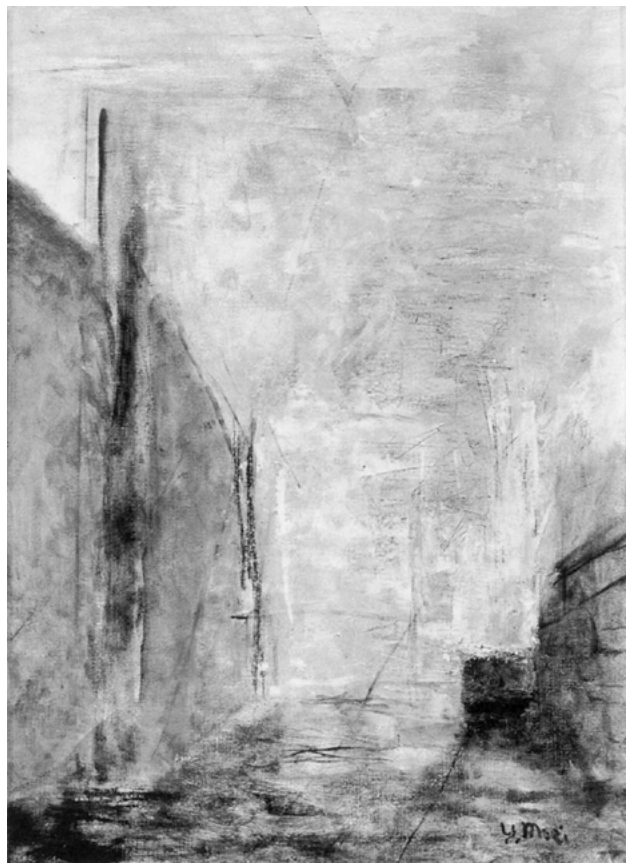
「雑草のある風景」 F10 1958 年

山崎さんの後、名古屋画廊の中山氏がコメントされ、画家である以上に人間森芳雄であったという思いが語られる。また展覧会にも出品されていた売れるはずもないであろう《雑草のある風景》を購入した逸話も聞くことができた。

その後、私にもお鉢が回り、前述した作品《二人》を観た時の感動や森芳雄が自作を語る講演を聴講した際に、自作をほぼ否定しながら進行する森芳雄の制作に対する厳しい姿勢に感銘を受けた話。そしてアトリエの整理にお邪魔した際に見た膨大な素描やデッサンの積み重ねが、作品の土台になっている話などをした。

最後に娘の門田正子さんから父森芳雄への想いが語られ、父から聞いたことがない話が聞けたと今回の展覧会に対する感謝の言葉が伝えられた。

このように展覧会場は、人間森芳雄に対する尊敬と愛に満ち溢れた空間となっていた。あれだけの画業を残した森芳雄でも最後まで謙虚であった。絶筆《道》のずっとずっと先に想いを寄せていたに違いない。自己否定と肯定の狭間の真実を探りながら、地に足をしっかりつけて歩んでいくしかないと思った一日であった。



「道」(絶筆) P20 1997 年(展示されておりません)

## 芸術の意味

ハーバート・リード 著



## 「芸術の意味」

著者／ハーバート・リード  
訳者／瀬口修造

芸術を単なる美の追求ではなく、人間の感情や理解を他者に伝えるための「形式(フォーム)」の創造であると定義した名著。

リードは「美=芸術」という従来の固定観念を否定し、時代や文化によって美の基準は常に変動する相対的なものであると指摘した。華やかな絵画の傑作だけでなく、無名の職人が作った陶器のように自意識の少ない工芸品にこそ、その時代の本質的な精神が最もよく表れると論じている。

さらに、フロイトやユングの精神分析学を取り入れたリードは、芸術を頭で考えた明確な意志の産物ではなく、人間の無意識や内的生命から湧き出るエネルギーの顕現として捉えている。この画期的な視点によって、当時はまだ世間に受け入れられにくかったヘンリー・ムーアの抽象彫刻やシュルレアリスム、構成主義といったモダンアートの価値をいち早く見出し、その芸術的意義を理論的に見事に証明した。

## 歴代名画記



## 「歴代名画記」

著者／張彦遠  
訳者／長廣敏雄

9世紀の唐代に張彦遠が著した中国美術史上最初期の体系的な画論・画史書。全10巻で構成され、前半は絵画の歴史や技法、収集のあり方を論じた「画論」、後半は古代から唐代に至る画家370人の評伝をまとめた「画史」となっている。単なる画家の記録にとどまらず、絵画の本質を理論的に体系化した美術史の古典として不朽の価値を持っている。

特に第1巻では、6世紀に謝赫が提唱した絵画の6つの評価基準「画の六法」について、独自の重要な解釈を展開。

張彦遠はここで、形や色彩を本物そっくりに似せる技術よりも、対象の生命感(気韻生動)や、筆線に宿る文人の高い精神性(骨法用筆)こそが最も重要であると主張した。

この解釈は、のちの中国絵画が単なる写実を超えて、内面世界を表現する文人画や水墨画へと発展していく決定的な方向性を示した。

# 森 芳雄プロフィール



## 森 芳雄

Mori Yoshio

1908 ~ 1997年

1908年(0歳)明治41年 東京市麻布に生まれる  
 1921年(13歳)大正10年 慶応義塾普通部入学  
 1923年(15歳)関東大震災で次兄を失う  
 1926年(18歳)昭和元年 美校受験のため、本郷絵画研究所へ通う  
 1927年(19歳)東京美術学校の受験に再度失敗、農園で働き、傷ついた神経を休める  
 1931年(23歳)渡仏  
 1932年(24歳)滞仏中の今泉篤男・浜口陽三・山口薫らと知り合う  
 1934年(26歳)帰国  
 1935年(27歳)森芳雄滞仏作品展(近代画廊)  
 1945年(37歳)空襲で家が全焼、戦前の作品のほとんどを失う  
 1951年(43歳)武蔵野美術学校講師となる  
 1962年(54歳)武蔵野美術大学教授となる  
 森芳雄・麻生三郎展(神奈川県近代美術館)  
 1964年(56歳)主体美術協会結成  
 1981年(73歳)武蔵野美術大学退職 名誉教授となる  
 妻きみ死去 教会で洗礼を受ける  
 1990年(82歳)森芳雄展(茨城県近代美術館)  
 1997年(88歳)第33回主体展に「道」「海」を出品  
 11月に老衰のため自宅で死去  
 2003年 森芳雄追悼文集刊行

## 森 芳雄の言葉

### 森芳雄が考える自身の絵画について

ー「日経ポケット・ギャラリー」1991年より

森 芳雄(当時83歳)

(前略) 第二次大戦後、既に半世紀以上経っているが、ヨーロッパの絵画の戦後の新しい動きは、戦前と比べものにならない程、直接に、多様な造形理念、表現形態の新しさとして、美術界に影響を及ぼすようになった。その中で、とくに目ざましいのは、抽象の動きであると思う。純粋に形態の美を追求する、つまり、純粋な造形の追求。僕は、この方向を憧れつつも、踏み切れずに、現在に至っている。僕が、現在生きているこの風土から生まれてくる色彩と形態の中から、新しい何かを掴めればと、それを求めて、今後も筆を執って行きたい。今日、絵を描くことについては、実に自由なこだわりのない気持ちでむかうことができる。色々な、生活感情、体験、その他を通して表現は自由であろうと思うからである。(「はじめに」の項より)

(前略)僕はイタリア現代作家達の仕事に憧れを持っていたから、何とか近付きたいと思っていた。実態の処理と背景の関係の勉強になった。一応の結果が出せた時には、ヨーロッパへ勉強に行ったことが無駄じゃなかったと思った。(「肘つく女」の項より)

この絵を描いたときは、経済的にも精神的にも、とにかく戦後のどん底だった。紀伊国屋書店の社長に頼んだら気持ちよく買ってくれて、その年が越せた。長いこと店の正面に掛けてあった。この絵が僕の代表作の一点としてこれほど評価されるとは思わなかった。わからない

もんだね。この頃も今も変わらないことは、僕は“人間”を描きたいっていうことだ。(「二人」の項より)

(前略)今、気が付くことは、基本的技巧を習得していないと、意図と結果がずれるということだ。このことは未だに勉強中だ。(後略)(「静物」の項より)

(前略)正面を向いた自画像は苦手で、一枚も描いていない。(「画家と家族」の項より)

僕の場合、具象だから、人物をモチーフとすると、ポーズにも制約があるし、ある意味で瞬間をとらえなくちゃならないわけだ。その点静物の場合は、構図や色彩等、自らの意図をより自由に追及できるし、同じ状態を気を使わないで継続して見ていられるから楽だね。(「果実」の項より)

率直に言って人物の構成は群像になると難しい。日本の明治以降の油絵にはその積み重ねが少ないと思う。(「壺」の項より)

(前略)ギリシャ・ローマ彫刻や西欧の絵画における人体と、それにまわりつく着衣の表現は実に見事だね。それは、何年前に行ったポンペイのロマネスク風壁画、その後続いたビザンチン、チマブエ、ジオットの人間性回復、15世紀までのイタリアの作家の仕事、マサッチオ、フランチェスカ、ボッティチなんかの作品にもよく出ているし、僕はその時代に魅力を感じるね。(「白いテーブル」の項より)

## S-Gallery 肅燦寶美術館



しゅくさん ぼう  
 S-Gallery 肅燦寶美術館は、境町における文化振興の拠点や地域活性化を目的として、2020年8月に世界的建築家の隈研吾氏設計により建てられた美術館です。  
 隈研吾氏らしく木を多用し白を基調とした美術館では、孤高の画人と呼ばれた肅燦寶作品の展示をはじめ、「境町アートプロジェクト」による様々な展覧会・イベントが開催されています。



住所:〒306-0433 茨城県猿島郡境町坂花町1455-1  
 電話番号:0280-23-4148 メール:gallery@sakaimachi.co.jp



- 東武線東武動物公園駅から／朝日バス「境車庫」方面 約40分 →「坂花町」下車
- JR古河駅から／朝日バス「境車庫」方面 約30分 →「境町(河岸の駅さかい)」下車
- 東京駅から／高速バス東京駅境町線 約80分 → 自動運転バス「境町高速バスターミナル」約40分 →「干し芋カフェ」下車
- 圏央道境古河ICから／車で約10分

【駐車場はこちらを参照】 <https://www.sakaimachi.jp/shukusampo-museum.html>

## 第58回主体美術神奈川作家展

会期／2026年3月3日(火)～3月9日(月)

会場／横浜市民ギャラリー2F

事務局 石田 俊哉

さる3月3日(火)～3月9日(月)まで、横浜市民ギャラリーにおいて第58回主体美術神奈川作家展が開催され、好評のうちに終了いたしました。ご協力いただいた関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

近年出品者が減少してきていますが、今回は昨年度より若干増え34名の参加になりました。様々な事情により参加や受付当番が出来ない方が居りましたが、参加者の方々のサポート等により無事に終了しました。今回も遠くから主体展の方々がご来場くださり大変うれしく思います。

第58回展は初出品の方が3名も出品していただき、今年の主体本展が楽しみです。神奈川作家展では以前から本展の初出品の方に搬入受付時や懇親会の時に神奈川作家展が「3月に開催されるのでぜひ出品して下さい」と声をかけるようにしています。声掛けはこれからも続けていきたいと思っています。

又、神奈川作家展の募集要項を見直し1人3メートル以内とし小品の



複数展示も可能とした事で、出品しやすくなったと思います。その他では、以前は出品料と懇親会費が込みの参加費でしたが今は出品料と懇親会費を別にして懇親会に参加出来ない方も参加しやすくなったと思います。

会場研究会は来年度から開始時間を調整してもう少し早い時間帯で行うように予定しています。

会期中の反省会では出品者の皆様からいろいろな意見をいただき、少しでも多くの方々が参加しやすい様に工夫しながら次回も充実した展覧会にしたいと思っています。

## 第59回主体美術中部作家展

会期／2026年3月24日(火)～3月29日(日)

会場／愛知芸術文化センター8階 愛知県美術館ギャラリー(E・F室)

事務局 三浦 洋次

第59回主体美術中部作家展は令和8年3月24日(火)～29日(日)、愛知県美術館ギャラリー(E・F室)で小品展と併せて開催しました。展示内容の概要は、出品者26名、出品点数37点、小品展出品者22名、小品出品点数22点。入場者数1061名でした。

主体美術中部作家展では、各自、新たな作品を創造するための実験の場として活用していますが、大作と同様に小品展示にも注力しております。各作家の普段の大作とは異なったイメージの作品が展示されますので大変興味深いと思います。又、小品展示を東京本展の為に参考に行っている作家もいますし、少しでもより良い作品を創造するために各自励んでおり、それが将来実を結ぶことを期待しています。

主体美術中部の組織としては、他団体と同様、会員数減少傾向が悩みの種ではありますが、各会員の努力もあり、本年度1名の増員となりました。大変喜ばしい事とっております。また、昨今の物価上昇の影響を受けて、運送費も値上げ予定を通告されて来ております。更に経費



節減が、必要と思っています。

例えば例年行っていますが、中部作家展のポスターは新しく制作するのではなく、本展のそれを期日、開催展示場名を張り替える等の工夫をしています。

次回の主体美術中部作家展は、令和9年3月に予定していて、60回記念展となります。展示会場を少しではありますが広めの会場を計画していますし、併せて機関紙の発行を予定しています。各会員の思いを絵画作品だけでなく、文章でも表現できればと思っています。

主体美術中部作家展はこれからも微力ではございますが、中部地区の美術に貢献していきたいと考えております。

## 第54回主体美術武蔵野作家展

会期／2026年4月7日(火)～4月12日(日)

会場／埼玉県立近代美術館 B1階一般展示室2・3

事務局 大西 佐頼

第54回主体美術武蔵野作家展は2026年4月7日(火)～12日(日)に埼玉県立近代美術館B1階 一般展示室2・3でのメインの展示と展示室廊下を利用した小品展という形で開催しました。出品者は東京、埼玉、群馬、茨城の主体美術協会会員および主体展入選者、入選経験者で、今回は42名、展示室45点、小品展24点の展示となりました。

会期中の土曜日11日の15時から会場研究会、17時半より美術館内のレストラン「ペペロネ」にて懇親会を開催しました。展示室を可動壁で3室に区切りそれぞれ具象・抽象・混合となっていたので、会場研究会は1室ごとに2～3人の会員に進行役を務めてもらい、作者ごとに絵について語ったりざっくばらんに意見交換を行うスタイルで進めました。近隣地域の会員の方も懇親会に合わせて多数来場くださり、会場で出品者から絵について受けた質問にコメントしたり、懇親会でも絵の話で大いに盛り上がる姿が見られ大変嬉しく思いました。

武蔵野展でも高齢の方が増えてきて、長年出品されてきた方が体調不良で出せないというような話に心を痛めつつ、いっぽう若い方の参



加も増えていて、初出品の方も5名いらっしゃいました。また、会員からの推薦があり主体展への出品経験がない方にも応募要項の発送を行いました。これは今回は出品には至らずでしたが、来年はもっと準備して是非出品したいとお返事でしたので、今後に繋がればと考えています。

運営面では、郵便料金や美術館の借館料が上がっているなか、少しでも経費を抑えようと、作品タイトルやサイズ・当番可能日の連絡等にメールやLINEグループを併用することを試しています。基本的には郵便での案内なので、メールでの返信は手間がかかるのか思ったよりもハガキでの返答が多かったのですが、今後より活用されやすい運用を探していきたいと思っています。

## 主体ちば作家展2026

会期／2026年5月4日(月)～5月10日(日)

会場／船橋市民ギャラリー 第1展示室

事務局 土川 祐子

本年度もちば展は、船橋市民ギャラリーを会場に開催され、多くの皆様のご協力のもと無事終了いたしました。

今回は24名の方々が出品し、それぞれが日頃の制作成果を発表する機会となりました。会場には個性豊かな作品が並び、来場された皆様には多様な表現の魅力を楽しんでいただくことができたのではないかと思います。

会期中の来場者数は600名を超え、予想を上回る多くの方々に会場いただきました。作品の前で足を止めて見入る姿や、作者と鑑賞者が作品について語り合う様子も多く見られ、会場は終始活気に包まれていました。絵画を通じて人と人とつながる場となったことを、大変うれしく感じています。

また、レセプションも盛況のうちに開催することができました。会員同士の交流はもちろん、ご来賓の皆様との会話も弾み、和やかな雰囲気の中で親睦を深めることができました。作品について語り合い、互いの



制作への思いを共有する時間は、参加者にとって大変有意義なものとなりました。

地域展は作品発表の場であると同時に、地域の皆様に美術へ親しんでいただく貴重な機会でもあります。今回の展覧会を通して、多くの方々に美術の楽しさや奥深さを感じていただけたのであれば幸いです。

最後になりましたが、ご来場くださった皆様、ご支援いただいた関係各位、そして展覧会の成功に向けて力を尽くしてくださった出品者の皆様に心より御礼申し上げます。今後もより充実した展覧会を目指し、地域の美術文化の発展に努めてまいります。

※各地域展の様子は、主体展のYouTube(ホームページの「お知らせ」)に掲載からご覧になれます。

## 第61回主体展 企画展示のお知らせ

# 『私の仕事 いま・むかし(IV)』

第61回主体展の企画室では「私の仕事 いま・むかし(IV)」を展示致します。

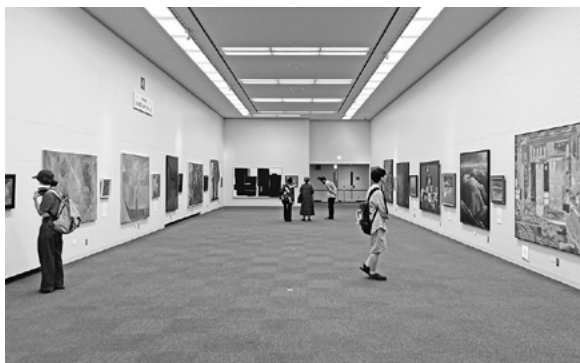
今回は39回展(2003)～44回展(2008)の会員から15名の参加です。作家の〈原点〉ともいえる旧作と現在の作品を並べて見ることで、その作家の過ごした長い時間とその間の表現の深化に想いを馳せるのも興味深いのではないのでしょうか。主体展と共に歩んだ個々の作家の足跡と併せて、主体展の未来を展望する企画としてご覧いただきたいと思います。

展覧会委員 藤田 俊哉

### 企画展示 「私の仕事 いま・むかし(IV)」 出品予定作家(敬称略)

|       |       |            |       |
|-------|-------|------------|-------|
| ■39回展 | 高澤 一郎 | 本間 龍松      | 前川 アキ |
| ■40回展 | 田中 和枝 | 横井 薫       |       |
| ■41回展 | 多田 欣子 | グエン・ディン・ダン |       |
| ■42回展 | 大林 賢三 | 小野由紀子      | 加藤 嘉巳 |
| ■43回展 | 佐野 未知 | 島田 邦麿      |       |
| ■44回展 | 大庭 寛明 | 水戸麻記子      | 森脇 ヒデ |

### 59回展の企画展示「私の仕事 いま・むかし(Ⅲ)」(第4室)



# 長沢 晋一氏

今回から、主体美術会員へのインタビューのコーナーを企画しました。生い立ちから美術に関わることになったきっかけ、影響を受けた作家や独自の技法、さらに制作の根底にあるものなどを、じっくりとお聞きしました。普段なかなか聞けない話を掘り起こします。  
第1回は長沢晋一さんにお願しました。また、インタビューに新会員の東堤友美さんをお迎えしました。

## インタビュー

東堤 友美（東京都）  
編集部：桑原 雄一・山崎 清子

## プロフィール

1974年 武蔵野美術大学実技専修科卒業  
1976年 個展（みゆき画廊 銀座）  
1982年～ 主体展出品（1999年会員推挙）  
1983年～ 埼玉美術の祭典出品（現在のCAFネビュラ展）  
1984年 個展（みゆき画廊 銀座）  
1989年 個展（みゆき画廊 銀座）  
2006年 コンパレゾン展（グランパレ パリ）  
[～2024年]  
2012年 個展（あらかわ画廊 京橋、銀座）  
[～2026年（隔年）]  
2013年 ベストセレクション展（東京都美術館）  
2024年 日韓展（韓国大邱市）  
2026年 日韓展（韓国大邱市）



■東堤 子供の頃どんな環境で育ちましたか。

▶長沢 正直なところ、子供時代の記憶が極めて少ないんだよね。今でこそ私の住んでいるあたりも家で埋まっているけれど、子供の頃は本当に田舎だったから、家の周りの変わる前の景色を思い出すことはあっても、こんなことがあったあんなことがあったと言うことを思い出すことがほとんどない…。そんな中でも、子供の頃の不思議は、よく空を飛ぶ夢を見たことくらいで、未就学の頃か小学校の低学年の頃だったと思うのだけれど、何度もふわふわ浮いて手を前に出すように、地上を眺めている。これは後からの理由付けなのだけれど、子供の頃「ノンちゃん雲に乗る」というテレビだったか絵本だったかそんなのがあった記憶がありその影響かもしれません。アレは不思議な体験だった。大きくなるといつの間にかそんな夢は見なくなってしまったんだよね。

■東堤 子育てをしている身として、長沢さんみたいに世に羽ばたいて行って欲しいと思ったら、どんな環境で育てたらいいんだろうと想着。

▶長沢 私はどちらかというと、あまり自分から何かを開拓していくタ

イプじゃなくて。でも以前子供向けの美術教室をやっていて、5年計画でお金を貯めて、5ヶ月のヨーロッパ旅行したんです。バックパッカー的な感じで、リュックだったか、でも野宿も駅に泊まるようなこともなくて、ほとんどホテルなんだけど、昼頃に新しい街に着いて、ホテルを探し、街を歩き美術館や教会、遺跡を巡る、また次の街への地図を開いて列車に乗る、それを5ヶ月。羽ばたいてるかどうかかわかんないんだけど、やってみると結構面白かった。その年が主体展初出品だったと思うのだけれど、搬入時日本にはいなかったのにどの様にして搬入したのか覚えがない。

■東堤 美術の世界に進むきっかけは？

▶長沢 年の離れた従兄弟がいて、その従兄弟がいわゆる日曜画家で、その人への憧れがあってね。中学時代はプラスバンドだったのだけれど、高校に入ったら美術部に入ることを受験前から決めていて、その入った先が美大を受験する先輩が毎年いたので、自然と予備校に通い美大に入ってしまった。でも、今でも絵を画いて生きていく、という意識はあまりないかもしれない。絵も画いていく、と言う感じかな。絵を描く、画く、というより、作品を作るかなあ。



■東堤 学生時代のこと、影響を受けた画家について教えて下さい。

▶長沢 やはり山口長男の作品に出会えたこと、この偶然はきっと凄いことだと思います。長男に憧れて実専（実技専修科）に入った人もいるけれど、私は受験の頃は長男を知らなかった。大学時代も直接指導を受けたことはほとんど無かった。研究室に入るとそこで会えたり、天平という飲み屋に行くとそこで会えたり…。自宅にも行ったことがあったりはするんだけど、それほど深く先生に指導を受けたという感覚ではなくて、どちらかという他に松樹路人とか宮田農哉という先生がいて、関わりとしてはそっちの方が深かった。ムサビの食堂の広いところに長男の作品がずっと飾ってあって、それ観ながらだんだん意識するようになったんです。

私が大学を出て初めての個展の時、突然先生が画廊に入ってきて、作品一点一点について話をして帰って行った。どんな話だったかなどまったく覚えていなくて、DMに実専卒業くらいのこと書いたと思うのだけれど、それだけで画廊の階段を上がり、話をして帰って行く、きっと私の名前など記憶にないと思うのだけれど。私のこの世界での原点と言えばそんなところかもしれない。そんな経験があって、びっくりしてね。やっぱり山口長男はやるのが違うなんて勝手に思って、自分は長男にはなれないけど、こういうことなら自分もできるんじゃないか、そういう経験というか、勉強をさせてもらいました。

■東堤 個展にパリを選んだ理由を教えてください。

▶長沢 人と人の繋がりで偶然にもパリに行き続けることになりま

した。誘ってくれた画廊主がパリ在住日本人でね。パリは実に魅力的な街です。何が？と問われても何もかも、と言うしかない。最初に行きだした頃は、歩道は犬の糞だらけだし、スリに追いかけられたり、言葉が分からず量り売りの果物が買えなかったり、だけれど、やはり魅力的な街です。グループ展ではパリに住む日本人と出会うことも魅力のひとつ、実に不思議な人たちです。どんな風に生計を立てているのかさっぱり分からない。主体で出会う人たちと何にも変わらないけれど同じではない。



■山崎 庭やご自身のアトリエ、住まいについて、大切にしていることを教えてください。

▶長沢 少し前に夢中になっていたのがバラの栽培、その後が山野草や山紫陽花、そして今夢中になっているのが、野菜作り…今まで経験した十種類以上の野菜たち、自給自足とまでは行かないけれど…今までもバラ作りの合間に絵を画く、陶芸の合間に絵を画く、今は畑仕事の合間に絵を画く、ずっとそんな感じなので自分が画描きだと思えない。

■山崎 制作していて立ち止まった時はどのように過ごされますか？

▶長沢 制作しだしたら立ち止ま

らない。主体の作品作りは1ヶ月半なので、立ち止まる余裕がないのが実情、だから制作始める前に立ち止まる。行き詰まったらその時は何でもいから体を動かす。始める前の立ち止まりはいい時間だと思う。

■山崎 「主体WEBギャラリー2020～今をつなぐ～」で33年前に制作された具象の絵を拝見しました。具象から現在の抽象表現に変わる転機やその理由を教えてください。

▶長沢 私は主体に出品してしばらくしてから、CAF.N\*という大きなグループにも所属するようになって、そこには技術的にも上手く、魅力的な作品を作る人が大勢いた。そんな環境への憧れ？ なんだろう、いろんな想いがあったような記憶があります。そんな折に黒浜鉄（砂鉄）に出会って、それを絵具として使うことを決めて、この絵具で何が出来るか、がスタートになったと思います。

\*CAF.N / 公募団体の枠を超えた抽象作品多数の作家集団。埼玉県近代美術館を拠点に活動。「CAF.N」の「N」は星雲（Nebula）を意味している。

■山崎 陶芸を始められたきっかけについて、また、陶芸が絵画制作に与える影響について教えてください。

▶長沢 きっかけは自宅で私と女の先生で開いていた子供向けの美術教室で、なにカレパトリーを増やしたい、陶芸がいいのでは、それには経験の無い私たちが勉強せねば、さてどっちが習いに行くか、より自由な時間のあった私が教室に通い、陶芸を学習。きっかけはそんなたわいも無い理由です。制作に与えた影響は勿論、黒浜鉄との出会いです。

■桑原 黒色の下に隠された金属的な反射はなぜうまれるのですか？

▶長沢 それはあの絵具が鉱物だ

からだと思う。私は手で触れる感覚や、手で触れなくなる感覚が好きなんだと思う。黒浜鉄を油に混ぜてそれが酸化して画面に固定される。折れに弱いから、裏にベニヤが貼ってある。木枠とキャンバスでは耐えられない。常にパネルがあって、そこにキャンバスを糊付けして、その上にあの黒が貼り付いている。下がベニヤだから上からサンダーをかけたりすることもできる。

クイックドライメディウムというオイルを使っていて、強い速乾用ではないけれど、ポピーよりも速乾性がある。これを使い始めた頃いろいろサンプルを作ってね、溶剤の実験をしてどれが一番耐久性があるか、ひび割れないか、それで一番亀裂が起きにくかったのがクイックドライメディウムだった。絵具として流通していないということは、リスクがある。固まると修正が難しい、いろんな欠点があるんだけど、扱いによっては魅力的な色が作れるんだよね。

■東堤 《PLATE》という作品に行き着くまでの背景を教えてください。

▶長沢 最初私のタイトルは、《玄》だったと思う、それから《WALL》それから《PLATE》。美術で習う絵は、手前、中程、奥というような二次元のキャンバスに三次元を作り出す行為、でも私が魅力に感じたのは、「垂直に立つ壁」。長野辺りを車で走っていたときに突然出会った岩の壁だったり、ミラノで出会った「ドゥオーモ」の大きな扉の壁だったり、ニュースで見る東西を分けるベルリンの壁だったり… それが《WALL》の時期。《PLATE》を意識したのもテレビからだと思う。大きな地震の時のニュースで決まって映し出される地球の断面図、プレートの沈み込みと反発という誰も見たことの無い、わけの分からない出来事が図で映し出される。地球の内部で起こる不思議、それを形にしたのが《PLATE》なんだと思います。



《P3 地球》（キャンバス、油彩 1997年）



▲《PLATE》（パネル、キャンバス、黒浜鉄、オイルパステル、他 2024年）

■東堤 制作する時は、あの時の思いを描きたいという気持ちから描いたりするんですけど、これだ！みたいなアンテナがピーンと立つ時はありますか？

▶長沢 私の制作はどちらかというと形から入っていくんですね。立体作家ではないんだけど、ベニヤを前にして思うところもやっぱり形。自分の納得する形とか、自分の形を作る線、いい線を見つける。3枚のベニヤを前にして線を引いて形を作る。その形に従ってベニヤを裁断して作品を造っていく。

もともと《WALL》の頃は自分でも作品が硬いという意識がありました。松井豊さんが「あなたの作品にこう色気があったらいいんだけどな」と。私的には、鉱物でやってるから、四角い画面の中でやるとどうしても硬くなるんだよね。松井さんの言う色気がどんなものなのかは分からなかったけれど、私なりの試みは画面の中に曲線を入れることだった。それで試行錯誤している時期と沈み込むプレートの曲線が繋がったような…。

松井さんの言う色気とまでは言わないけれども、何かこう、硬さから少しでも抜けられるんじゃないかなというのがあって、《PLATE》が始まった感じかなあ。

子供の頃ね、天の川がなんで天の川なのかわからなかった。天の川の正体が星の集まりなのは分かるけれど、どうしてあの川のようになるのか。宇宙とか地球とか地球の内部もテレビで説明されても、見ているわけじゃないから不思議なことばかり。もし生まれ変わって何か違う勉強ができるなら、天

文学とか地質学とか、そういうことを語るのが憧れ、勿論プロではなくて余技としてだけ。

■東堤・桑原・山崎

本日はお忙しい中、ご協力いただきありがとうございます。

（2026年6月6日 ロイヤルクリスタルカフェ銀座にて収録）

## インタビューを終えて

長沢さんのお話を伺い、自然や目に見えない大きな世界に対する天性の感受性と探究心を感じました。幼少期の空を飛び夢の記憶や岩壁、地層、宇宙への関心からは、長沢さんが大切にされる「対比」の視点も伝わってきました。また、《PLATE》に至る制作過程を通して、自然界の営みや地球の成り立ちへの興味が独自の造形表現へと昇華されていることに感銘を受けました。穏やかな語り口の奥に、物事を真摯に見つめ続けてこられた深い眼差しを感じた時間でした。この度は貴重な機会をありがとうございました。（東堤友美）

今回はインタビューの内容を事前にお伝えし、その項目に沿ってお話いただきました。

長沢さんはそのすべてを文章でも準備して下さり、そこから発展し、パリや日本各地で行われた展示のこと、ギャラリーのこと、旅のこと、野菜作りのこと、30年も続けていらっしゃるお茶のことなども興味深く伺いました。全部載せられなくて残念です。また、このインタビューの事前準備に際し、ご協力、アドバイスをいただいたみなさまに心より感謝申し上げます。

ありがとうございました。  
（編集部／桑原雄一・山崎清子）

## フォト・エッセイ

## ワインとは人生のようなものだ

藤木 もとひろ(東京都)

15年ほど前ワインソムリエと話す機会があり、再び赤ワインに興味を持つようになった。そもそも大学時代にボジョレーヌーボーの論文を書いたことがワイン好きになったきっかけであったと思う。当時、カナダに住んでいた私はフレンチレストランのオーナーと知り合いワインのこと、また食事と共に嗜むことの素晴らしさを教えてもらった。彼がフランス人だったこともありボルドーワインに傾倒していった事を覚えている。表題の句も彼から聞いたものである。それが今日でもボルドーワインに引き寄せられている理由なのだと思う。

赤ワインの味は甘味、酸味、苦みそして香りで成り立っているが産地によってその傾向が違う。アメリカワインは濃厚で果実味が豊か、フランスワインは甘味が控えめで渋味と酸味とのバランスが重視されている。その他の地域(イタリアなど)はその中間と言ったところだろう。また、コストパフォーマンスの観点から見るとチリワインなどもおすすめだ。しかしスーパーで比較的容易に手に入れられるワインでも良いものはある。約1300円ほどで売られている「BERINGER MAIN&VINE」というカリフォルニアワインである。赤ワインの入門編としては万人に受け入れられる味なのではないだろうか。カベルネ・ソーヴィニヨンの果実味がダイレクトに味わえ更に土地のテロワール(土地の個性)をも感じることが出来るすぐれものだ。このようなワインが探していけばどの価格帯でもまたどの国のワインでも見つかるはずだ。あとはワインと共に何を食べるかである。私はスーパーで買えるものではピーナッツやカシューナッツ、カマンベール(明治)やブルーチーズ(ジェラール)そしてそれらをのせるクラッカーである。ワインによってはそこに干しブドウを添えたりして楽しんでいる。

赤ワインの面白さは単なる表立った美味しさに限らず文化と

も言える味を作り上げる工程や風土、その精神性からくるものだと思う。数年前、知人から記念日に頂いたワインを開けた。そのワインは素晴らしく美味しく開けたのを後悔するほどであった。良いワインには飲み頃というものがあつたそのワインは明らかにまだその時期を迎えていなかったのである。かと思えば、自分で購入し楽しみにして開けたワインがダメな時もある。それは「ブショネ」というコルク栓を始め様々な要因で引き起こされるワインの劣化状態の一つなのだ。この様に「彩り」を与えてくれるのもワイン'思い通りにいかない'というのもワインなのだ。まるで人生のようで'ままならない'も含めて楽しみたいものです。

このように若いうちから楽しめるワインもあれば熟成して初めて真価を発揮するワインもある。どのような場面でも人生に彩りを与えてくれるスパイスのような存在と言える。また、芸術とワインも同じように形容出来るのではないか。人生として例えられるものが「時間や経験」だとすると芸術に例えられるのは「創造性や感性」でありワインは五感で観賞するアートと言えないだろうか。良いワインは絵画のように感情に訴えかけ記憶や想像力をかき立てる。絵画における画家のようにワインの造り手は葡萄を用いて自分の世界観やその土地の個性を表現する。どの品種をどのように仕上げるかその全てに造り手の確かな意思が存在するのである。是非ワインの旅をしてお気に入りの1本に出逢ってください。

「Le vin est comme un tableau.」(ワインとは絵画のようなものだ)



## 絵と、歩きと、ときどき登山

池田 正子(北海道)

早朝歩くのが好きです。コースは決まっています、港の対岸に位置する室蘭岳を眺めながら、刻々変わる空の色、風の流れ、雲や、潮の匂い、光それらを感じながら歩くのがとても好きです。

歩く事の延長線で山歩きもはじめました。初めは室蘭岳。小学校の遠足で一度登った記憶があつたので軽い気持ちでスタートしたもの、まもなく足に感じる重さに時の流れを思い知らされつつ、何とかたどり着くことができた頂上からの景色は最高です。呼吸を整え下り道では、かすかに小学生の自分が下って行った道を思い出すことができました。

その後二セコ山系や大雪山系旭岳・黒岳への挑戦、たくさんの登山者の方たちと言葉を交わすことができ、山の解放感も手伝って会話も弾みます。皆さん本当に清々しい笑顔です。珍しい遭遇もありました。地元の室蘭八幡神社の表参道では、エゾリスとぼったり、あっという間に木に登って見えなくなり、またある時には何段か先に落ちていると思われる枝が動き出した。よく見るとヘビです。びっくり、びっくりです。秋になると葉が落ちた木の枝に鳥の巣があらわれます。

自然が生み出す空気の流れ、何とかこの感じを絵にできないだろうか… 山道の石だったり、倒木だったり、枯れてしまった草木 etc… etc… 見入っている自分がいます。

歩き始めて、今まで気付かず見過ごしていたことが余りに多くて、今まで何を見ていたんだろうと自分にあきれてしまうこの頃です。そんなことを思いながら絵を描いています。絵を初めて途中12年間のブランクがありましたが、再開できた時の油絵具の匂いがあると云えない懐かしい匂いでした。

主体展への応募は、応募用紙を事務局から送っていただき、段ボールを貼り合わせ、梱包しての出品でした。途中コロナ禍を乗り越え現在まで絵を描き続けることができました。

日々の暮らしと朝歩きが続けられている事に感謝の気持ちを忘れず、私の中で蓄積してきた色や空気感を引っ張りだしながらこれからも絵を描いていけたらと思っています。



◀これから登る大雪山旭岳の1枚

各地の  
美術館から

池田20世紀美術館(静岡県伊東市)

## 開館50周年記念「水村喜一郎展」

生きて、旅して、絵を描いて…

返町 勝治(東京都)

2025年6月26日から10月14日まで伊豆半島の「池田20世紀美術館」で開館50周年記念として「水村喜一郎展」が開催されました。

この美術館は「伊豆の瞳」と称される噴火による火口湖・一碧湖のほど近くにあり、彫刻家・井上武吉氏が設計を担当したステンレススチールによるキュービックな外観で知られています。20世紀に制作された絵画・彫刻で「人間」をテーマにした国内外の作品を中心に1,500点ほどが所蔵されていて主体美術の会員だった大野五郎、寺田政明、司修らの作品も納められています。常設の部屋には田中保の「裸婦」やシャガール、ピカソ、ミロ、マティス、ダリ、ルノワール、ボナール、ウォーホル、デューニングなどの作品が並べられていました。主体展発足の頃から何かとお世話になった美術評論家の林紀一郎氏が長い間館長をされていました。

階段を下りた回廊から水村さんの作品が展示され、大作の部屋に繋がっていました。

水村さんは長年全国各地で数え切れないほどの展覧会を開いていますが、今回の展覧会は会期も長く幼少期から近年までの作品が50点ほど並ぶ大がかりなものになりました。学生の頃に描いたという「吊された軍鶏」は夏の夕方学校から帰ったら、鳶職の親方だった父の下に出入りする若い衆が宴会をしようと可愛がっていた軍鶏を捌こうとしていたので、怒りと悲しみで汗まみれになって一気に描き上げたそうで、荒々しいタッチの画面にはすでに強烈な絵描き魂が籠もっていました。

夕映えに佇む古い工場、レンガ造りの高架橋、古びた水門、運河沿いの船だまり、岬の灯台、さびれた漁港、小さな駅舎、なにげない下町の風景、異国の古都の路地裏などなど、副題の…生きて、旅して、絵を描いて…そのままに各年代の国内外の旅で取材した味わい深い素描や重厚な油彩はいずれも嘘がなく、人影が描かれていない風景でも、そこで日々の生活を営む人達の息遣いが色濃く漂っていました。

東京の下町、向島に生まれ育った水村さんは経済優先で急速に移り変わる「故郷」への思いを胸にどこか懐かしさを感じさせるものに惹かれるのでしょうか。厚く塗り込まれた画面からは、失われてゆくものへの深い思いが伝わってきます。

水村さんは若い頃から歌を詠んでいて、絵に漂う詩情と相通する情景が浮かびます。学生時代は与謝野晶子の愛弟子の中原綾子女史が主宰する短歌誌『スバル』の会員でした。

ふるさとの玉ノ井の名は今は無く子供の頃の迷路も消えて  
見返ればそれぞれの家に灯が点り暮れゆく山の小さい夕陽  
行く人の無き雪の道遠き駅ひたすら歩く冬の夕暮れ  
神保町古本屋街の秋の風足もとかさかさプラタナス舞う  
ふらふらと路地に入れば懐かしき井戸有り蓋に子猫眠れる



開館50周年記念

## 水村喜一郎展

生きて、旅して、絵を描いて…

2025年 6.26 ▶ 10.14

ギャラリートーク 9月23日(火) 13:30~15:00

●開館時間 9:00~17:00 ●休館日 水曜日(但し、7・8月は無休) ●入館料 大人1000円、高校生 700円、小・中学生 500円  
●主催 公益財団法人 池田20世紀美術館 ●後援 伊東市・伊東市教育委員会/静岡新聞社・静岡放送/伊豆新聞社/BCV ●協賛 ニシキグループ株式会社  
●協力 中口とどろく芸術家協会

池田20世紀美術館  
20世紀美術の巨匠たち IKEDA Museum of 20th Century Art

見栄えのする派手な花ではなく、路傍にひっそりと咲く小さく地味な花を見つめる絵も並べられていました。

山裾の我がアトリエの庭に咲く白い花びらどくだみの花

この道は終わりなき道キャンバスに筆を動かし野あざみを描く

会期後半の9月23日には大作が並んだ展示室で土方明司氏(川崎市岡本太郎美術館館長)、原田光氏(美術評論家)と水村さんの3人によるギャラリートーク(右写真)が行われました。用意された椅子はすべて埋まり大勢の立ち見客が周りを囲みました。旧知の3人の軽妙なトークにしばしば笑い声がおこっていました。



冒頭におこなわれた伊藤康伸館長の挨拶では、窪島誠一郎さん(無言館・残照館館主)からのお祝いメッセージが紹介されました。

「水村喜一郎ときいただけで身震いする。水村という人間に身震いするのか、水村の仕事に身震いするのか。おそらくその両方だろう。『生きて、旅して、絵を描いて』のつぎに『人の魂をゆさぶって』と付け加えたい。」

また会期中に届いた司さんからの手紙には「この展覧会を大野五郎さんも喜んでいるだろう」とあったそうです。水村さんを長い間応援してくれた寺田農さん(俳優)が2024年に亡くなられて姿が見られないのは残念ですが、水村さんが若かった頃から親身になってくれた父の寺田政明さんと共に、きっと遠くから見守ってくれていることでしょう。

改めてまとまった作品群を前にして思うことは、水村さんの絵は「うまい」のではなく、「すごい」のであって、それこそが私自身も求めている境地なのだと気付かされました。

## 展覧会記録

2026年3月～2026年7月下旬

## ■第58回 主体美術神奈川作家展

3月3日～3月9日

横浜市民ギャラリー

## ■2026松濤美術館公募展(TARO 他)

3月8日～3月22日

松濤美術館(渋谷区松濤2)

## ■第59回主体美術中部作家展

3月24日～3月29日

愛知県美術館ギャラリー(名古屋市)

## ■森 芳雄展

4月1日～5月6日

東栄宝美術館(茨城県境町)

## ■創作表現者受賞作家展

(オノ・ミチ・ヒロ 他)

3月27日～3月31日

ドロードギャラリー(新宿区早稲田)

## ■第6回ヴェロン會(井上樹里 他)

3月28日～4月5日

一宮市三岸節子記念美術館

## ■藤田俊哉展『TULIP-reprise』

4月2日～4月28日

ウィリアムモリス 珈琲&amp;ギャラリー(渋谷1)

## ■第54回主体美術武蔵野作家展

4月7日～4月12日

埼玉県立近代美術館(さいたま市浦和区)

## ■習志野市芸術文化協会 第42回芸術祭

(保坂 淳 他)

4月9日～4月11日

習志野市庁舎(千葉県習志野市)

## ■凌雲の環 vol.3(オノ・ミチ・ヒロ 他)

4月11日～4月19日

ギャラリー是空(三重県伊賀市)

## ■Monochrome 白と黒の世界

(長沢晋一 他)

4月13日～4月18日

ギャラリー志門(銀座6)

## ■HANAフェスタ A期(鳩貝悦子 他)

4月13日～4月18日

ギャルリVent(銀座6)

## ■東京アトリエ探訪

(大野五郎、末松正樹、寺田政明 他)

4月24日～6月14日

板橋区立美術館(板橋区)

## ■丸沼芸術の森40周年記念展

その歩みと続く夢(山本靖久 他)

4月25日～5月24日

朝霞市博物館(埼玉県朝霞市)

## ■山崎 弘展

4月25日～5月1日

ギャラリー・コバンダール(京橋2)

## ■森の春展(水戸麻記子 他)

4月28日～5月3日

さいとうGallery(札幌市中央区)

## ■第31回時のかたち展(中嶋修・結城智子 他)

4月28日～5月4日

横浜赤レンガ倉庫1号館(横浜市中区)

## ■主体ちば作家展2026

5月4日～5月10日

船橋市民ギャラリー(船橋市)

## ■伴 幸治個展

5月5日～5月11日

みなとみらいギャラリーA(横浜市西区)

## ■黒川節子遺作&amp;黒川洋展

5月10日～5月16日

ゆう画廊(銀座3)

## ■遠藤彰子とゆかりの画家たち

(大西佐頼 他)

5月11日～5月16日

GALLERYムサンGINZA(銀座1)

## ■奏彩Ⅳ7つの視点(山本靖久 他)

5月13日～5月18日

横浜高島屋美術館画廊(横浜市西区)

## ■中島佳子展 -地の付-

5月13日～5月22日

ギャラリー彩(名古屋市中区)

## ■前山陽子 和解のつづき

5月16日～6月9日

アートトレイスギャラリー(墨田区緑2)

## ■大西左頼個展 -いきものたちのうた-

5月17日～5月23日

SAN-AI GALLERY(東神田1)

## ■2026主体関西作家展(足立晋平、井川雅

子、岡本裕介、金沢綾子、津田益夫、豊福光行、

西森聰子、箱崎和美、広兼明子)

5月19日～5月24日

京都府立文化芸術会館(京都市上京区)

## ■渡邊俊行個展【祈りのかたち】

5月24日～5月30日

仲通りギャラリー(横浜市中区)

## ■リラの森・展(續橋守 他)

5月25日～5月31日

画廊 楽Ⅱ(横浜市中区)

## ■藤田俊哉油絵展 TULIP-reprise

5月27日～6月2日

松坂屋静岡店(静岡市葵区)

## ■ART ART ART! 2026

(永井美智子、前川アキ 他)

6月6日～6月21日

HOKKAIDO ART GALLERY

(札幌市中央区)

## ■11の指標展(長沢晋一 他)

6月16日～6月21日

中和ギャラリー(日本橋本町1)

## ■第48回キリスト教美術展

(續橋守、山崎 弘 他)

6月19日～6月29日

早稲田スコットホールギャラリー(西早稲田)

## ■極小展 -絵画- 2026(齋藤典久 他)

6月22日～7月2日

GALERIE SOL(中央区新富町1)

## ■第33回心に響く小品展(藤田俊哉 他)

6月23日～7月5日

ギャラリー ヒルゲート(京都市中京区)

## ■2026CAF.N金沢展(長沢晋一 他)

6月30日～7月5日

金沢21世紀美術館(金沢市)

## ■第37回豊田美術連盟展

(加藤嘉巳、草次千恵、田中和枝、塚田勉、塚本

照子、森伊津子、山口泰史、山田法子 他)

7月8日～7月12日

豊田市民文化会館A展示室(愛知県豊田市)

## ■clair-obscur(井上樹里、小林宏至 他)

7月21日～7月30日

高輪画廊(銀座8)

## ■平和を愛する美術展(小野由紀子 他)

7月21日～8月20日

藁科生涯学習センター(静岡市葵区)

## ●第61回主体展応募用紙は主体展Webサイトからもダウンロードできます。

主体展Webサイトトップ画面



※ホームページに展覧会情報の掲載を希望される方は、DM担当の  
**小林宏至さん**までお送りください。会員・出品者を問わず掲載い  
 たします。その情報は機関紙のこのページ(展覧会記録)にも反映  
 されます(記録なので事後掲載となります)。

## 編集後記

■今年の春、茅ヶ崎美術館で「生誕100年昭和を生きた画家 牧野邦夫 その魂の召喚」が開催された。およそ100点を越える油彩が展示され、日曜美術館でも放送された。絵画団体に所属せず、個展で実績を積み上げていった作家で、その絵画に魅了されたコレクターが多い。海外でも人気があると聴く。私が最も尊敬する作家で、自由な発想、幻想の世界で、抜群の描写力で観る者を圧倒する。牧野邦夫展は茅ヶ崎の後、足利市立美術館(6月20日から)でも開催される。牧野邦夫夫人の千穂さんによれば、今回の規模での展覧会はこれが最後になると思うとのこと。(桑原雄一)

■春から携わってきた特集と新企画の記事がようやく手を離れました。安堵と感謝の気持ちでいっぱいです。記事をまとめる前に、参考にと機関紙99号の水村喜一郎美術館での鼎談の記事を送っていただきました。生き生きと話者の息づかいが伝わってきて読み入りましたが、筆者としての視点でまた繰り返し読みました。何年経っても主体美術を伝えるものとして残っていく機関紙、責任の重さに身が引き締まる思いです。(山崎清子)

■今号から始まった「作家インタビュー」、一人の作家にここまで突っ込んでお話を聞くのは、あまりやってきませんでした。作品は前から知っていても、絵に対する思いなどは普段はなかなか聞けません。作家同士でより深いコミュニケーションをとっていく契機にしたいだけだと思います。読み応えのある紙面構成を考えて取り組んでいます。これまでの「アトリエ訪問」も、制作現場を通して作家性を探るよい手段でしたので、ご要望があれば、不定期ではありますがリニューアルして続けられればと思います。(山田礼二)

| 機関紙<br>『主体美術<br>118号』<br>制作スタッフ | ■事務局作業者    | ■執筆者  | 土川 祐子  | ■校正   | 長沢 晋一 |
|---------------------------------|------------|-------|--------|-------|-------|
|                                 | 山崎 弘(責任者)  | 大口 満  | 藤田 俊哉  | 山崎 弘  | 前川 アキ |
|                                 | 山田 礼二(機関紙) | 山本 靖久 | 山崎 清子  | 黒川 洋  | 他 執筆者 |
|                                 | 桑原 雄一(機関紙) | 石田 俊哉 | 藤木もとひろ | 桑原 雄一 |       |
|                                 | 山崎 清子(機関紙) | 三浦 洋次 | 池田 正子  | 山崎 清子 | ■巻頭素描 |
|                                 | 黒川 洋(会 計)  | 大西 佐頼 | 返町 勝治  | 返町 勝治 | 森 芳雄  |

| 2026年度<br>事務局体制 | ■責任者/山崎 弘 ■会計/黒川 洋<br>■展覧会/吉田 正・大西佐頼<br>■研究/井上樹里(ホームページ・SNS)・落合梨乃・前山陽子<br>■広報/【図録/出版】金沢綾子・山田加代子<br>【機関紙】山田礼二・桑原雄一・山崎清子<br>【発送】坪井健一 【広告】長谷川好美<br>◆巡回展/名古屋:三浦洋次 |
|-----------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|-----------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

| 2026年<br>第61回<br>主体展日程 | 本 展/東京都美術館(上野公園)<br>2026年9月1日(火)～9月17日(木)16日間(7日は休館)<br>公募搬入/2026年8月22日(土)・23日(日) 東京都美術館地下3階<br>名古屋展/愛知県美術館8F<br>2026年10月6日(火)～2026年10月12日(月・祝) |
|------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|